



ノーサイドの笛は鳴った



宮島良明さん

Profile みやじま・よしあき

昭和48年、長野県生まれ。東京大学社会科学研究所助教。専攻は世界経済論、アジア経済論。「希望学・釜石調査」では、主に「ラグビー（釜石シーウェイブスRFCなど）」の調査を担当。



2001年4月、企業チーム「新日鐵釜石」は、クラブチーム「釜石シーウェイブスRFC」へと生まれ変わった。この時点では、クラブチームが日本一を目指し、トップリーグに参戦する例は日本のラグビー界においては無く、さまざまな方面から大きな期待が寄せられた。その期待とは、主に次の二つのものに代表されよう。

一つ目は、「釜石ラグビー」の再生である。かつて、釜石を「ラグビーの街」として世に知らしめ、無敵の強さを誇った「新日鐵釜石」もV7達成後は不振にあえいでいた。1993年のシーズンからは、7年連続で下位リーグ陥落の危機にさらされながらも、何とか入れ替え戦に勝利し、上位リーグに踏みとどまっていた、いわゆる「裏V7」の時代を経験した。バブル崩壊後、日本経済全体が長期の不況に陥り、企業スポーツそのものが苦境に立たされていた。世紀末が近づくにつれて、企業によつては、運動チームの強化費を負担するどころか、チーム維持そのものが困難となるところもあった。この状況を打開する一つの方法が、チームの「クラブ化」であると考えられた。たとえば、サッカーでは、1993年、新しい時代に対応すべく、いち早くJリーグが立ち上げられ、企業が前面に出ない欧米型のクラブ運営が志向されていた。クラブ化により、チームの運営基盤を確保すると同時に、より多様なチーム強化策が可能になるものと期待されたのである。

二つ目は、一時の繁栄を失った釜石における地域再生の「起点」としての役割である。ど



ういうことかというところ、新生シーウェイブスこそが、長く釜石を分断した「壁」をぶち壊す「起爆剤」になりえると、多くの地元の人が考えたからである。「壁」とは、もちろん、製鉄所の内側と外側を分けた壁である。私が釜石でインタビュー調査をさせていた、たくなかでたびたび聞かれたフレーズであった。「鉄」の長い歴史のなかで、製鉄所と地元住民の間にさまざまなあつれきが生じてきたであろうことは、想像に難くない。V7時代でさえ、「釜石の」ではなく、「新日鐵の」チームであるという意識は、住民の間でも強かったとの向きもある。シーウェイブスが結成され、「新日鐵の」ラグビーチームは、「釜石市民の」ものとなった。選手としてだけではなく、ボランティアスタッフや応援団として、誰でも参加できるチームとなったのである。

去る2月23日、釜石市民の集いで、私は幸運にもあの松尾雄治さんとお会いする機会に恵まれた。純朴な元ラグーマンの私としては、「神様」にもお会いするような夢心地であった。

松尾さんは想像どおり、とても気さくで、快闊な方だった。色紙にサインをねだった私に、松尾さんは「Rugby Spirit」と書いてくれた。そうか、地域再生のまさにキーワードだと思った。

ご存じのとおり、ラグビーは15人と大人数で試合を行うスポーツである。体の小さな人、背が高い人、足が早い人、いろんな個性を持つ人が、それぞれ自分の役割を果たしながら、一つの楕円のボールを追いかけ、ゴールラインを目指す。もちろん、ここでは、強烈な自己主張も必要であるし、また、逆に自己犠牲の精神も欠かせない。「One for All, All for One」という言葉に代表されるように、ラグビーというスポーツは一人ではできないし、みんなが自分の役割を果たさなければ成り立たない。どこか、「まちづくり」と似てはいまいか。

また、試合終了のことを「ノーサイド」というのも、ラグビーの特徴である。ノーサイドとは、「サイド」がなくなる、つまり、敵と味方の区別がなくなることである。「ゲームセット」や「タイムアップ」というのは若干ニュアンスが異なる。試合中の激しいコンタクトプレーからすると、全く逆の発想である。釜石の「壁」の存在については前にふれたが、製鉄所が高炉を廃止し、新日鐵釜石ラグビー部が釜石シーウェイブスRFCとして生まれ変わった今こそ、このラグビーのスピリットが生きてくるのではないかと私は考える。

ノーサイドの笛は鳴ったのである。